

〔報 告〕

外国人看護師の就労に関する 三重県内の病院看護師の意識（第1報）

—外国人看護師が病棟で看護業務を実施することについて—

**Awareness of nurses in Mie prefecture about working of the foreign nurses (the 1st. report) :
About the foreign nurses's nursing care in a ward**

白石 葉子

【要 旨】

三重県の病院の病棟に勤務している看護師722名に対して、外国人看護師の就労に関する意識について調査した。回収率は86.4%であった。日本との経済連携協定による外国人看護師の受け入れについて「知っている」は全体の40.5%であった。外国人看護のコミュニケーションや看護業務について「かなりうまくいく」「大体うまくいく」「少し心配である」「かなり心配である」「わからない」の5択で聞いたところ、全ての項目において「少し心配である」が最も多かった。外国人看護師との協働について、「同じ病棟で働きたいか」「外国人看護師は日本の臨床に必要か」について「1（思わない）」から「5（思う）」までの5段階のうち、当てはまる数値を選んでもらったところ、3の回答が最も多かった。臨床看護師は、外国人看護師の受け入れについて否定的ではないが、実態を知らないために不安を持っていることが示され、受け入れを進めていくためには、外国人看護師への理解を促進することが重要であることが示された。

【キーワード】 外国人看護師 就労 日本人看護師 意識 三重県

I. はじめに

日本では少子高齢社会が進み、2030年に合計特殊出生率が2.07まで上昇し、女性や60歳以上の男女の労働力率を増加させたとしても、2060年の労働力人口は現在より1000万人減少すると推計されている¹⁾。日本政府は人材不足対策の一つとして、高度な能力を有し日本の国を支援してもらえ外国人を高度人材と位置づけて、在留資格を緩和するなどして受け入れを促進している。外国人看護師については、2006年より経済連携協定（Economic Partnership Agreement：以下、EPA）による受け入れが行われており、現在はインドネシア、フィリピン、ベトナムと実施している。その目的は、あくまでも「人手不足解消のためではない」としているが、全国の病院を対象として、外国人看護師を採用したい理由を調べた研究によると、「看護師不足を少しでも解消したいから」が1位から2位で

あり²⁾、将来的にも日本人のみでは看護師不足が解消できないおそれがある中、外国人看護師の受け入れニーズは高まると考えられる。しかし、現在のEPAのスキームでは、外国人看護師の入国後の教育支援は、語学や日本の文化、看護に関する6カ月程度の基礎的な研修が実施されるものの、それ以降は受け入れ施設に任されていることから、施設の負担は大きい。また、EPAによる外国人看護師の日本の看護師国家試験合格率は、2016年度は11.0%であり³⁾、外国人看護師候補者や施設側が努力しているにもかかわらず、十分な成果が出ていない。また、外国人が看護師国家試験に合格しても、現場の人間関係の苦労や日本や施設での文化になじめないなどの理由で、数年で帰国してしまうことが問題となっている。

日本の看護師国家資格を取得したベトナム人の看護師を対象とした調査では、職場においては言葉のニュ

アンスの違いや日本との生活習慣の違いによる困難さを感じていることから⁴⁾、外国人看護師に日本で一定期間、安心して働いてもらうためには、病院関係者のサポートが重要である。外国人看護師を受け入れている病院は全国でも約200か所と限られているため、殆どの日本人看護師は外国人看護師の受け入れについて、身近に考えたことがないと思われる。外国人看護師を受け入れる際は、現場で一緒に働く看護スタッフの理解と協力を得ることが最も重要である。

外国人看護師の受け入れ側の意識を調べたものには、全国の300床以上の病院541か所の管理者を対象として行われた調査があり、外国人看護師を採用したいかどうかについては、「採用したい」は46.1%と半数近かった⁵⁾。しかし、病院の看護スタッフを対象として外国人看護師の受け入れに対する意向や思いについて調べた研究は、1施設を対象としたものがあつたが対象者が約160名と少なく⁶⁾、複数の施設において調査した研究はなかつた。

そこで、本研究では一つの県において、病院で働いている看護師が、外国人看護師の日本での就労について、どのように考えるのかを明らかにし、外国人看護師を受け入れる際に、理解を深めてもらうための方策を考える資料を得ることを目的として行った。外国人看護師の病院での就労については、日本の看護師国家資格を取得しておらず、看護助手として働く場合と、日本の看護師国家資格を取得し、看護業務を行う場合が考えられる。本調査においてはそれぞれの場合における病院看護師の意識を調査したが、本論文では、外国人看護師が日本の国家資格を取得し、看護業務を実施する場合について報告する。

II. 方法

調査期間は平成28年3月7日から3月18日とした。三重県内の4病院で就労する看護職を対象として、自由意志による自記式の質問紙調査を無記名で実施した。対象とする施設は、200床以上の総合病院で、EPAによる外国人看護師の受け入れを行っていない所とし、三重県の2次医療圏として区切られている、北勢医療圏、中勢伊賀医療圏、南勢志摩医療圏、東紀州医療圏それぞれから1施設ずつ選定した。対象者は、入院患者がいる病棟（26病棟）に所属している看護師・准看護師（以下、看護師）722名とした。

質問紙の内容は、対象者の属性（年齢、臨床経験、病棟での役割）、外国人の看護師と働いた経験、外国人の患者を看護した経験、EPAにより外国人看護師の受け入れを行っていることについて知っているか、外国人看護師の病棟での就労について、外国人看護師と同じ病棟で働きたいか、外国人看護師は今後必要だと思うか、とした。外国人看護師の病棟での就労については、外国人看護師との日常会話、外国人看護師との専門的会話、外国人看護師が急性期あるいは慢性期の病棟で働くこと、看護業務（日常生活援助・与薬・保健指導・診療補助）を行うこと、それぞれについて、「かなりうまくいくと思う」「大体うまくいくと思う」「少し心配である」「かなり心配である」「わからない」の5項目から選んでもらった。さらに「わからない」と答えた人には、質問した項目に対する関心の有無を調べた。外国人看護師と同じ病棟で働きたいか、外国人看護師は今後必要だと思うか、については、「1（思わない）」から「5（思う）」までの5段階のスケールを示し、当てはまる数値を選んでもらった。各質問項目には自由記述欄を設け、自由に意見を書いてもらった。

質問紙調査で仮定した外国人看護師の条件は、日本語能力はN2レベル以上(日常生活の日本語は問題なく読み書きできる)で、自国での臨床経験を持ち、日本の文化や日本の病院や看護について半年程度の研修を受けていることとした。

研究実施に際しては、三重県立看護大学研究倫理審査会の承認を得た（通知書番号：153101）。

III. 結果・考察

質問紙に回答した人は、722名中、624名だった（回収率86.4%）。

1. 対象者の属性

対象者の平均年齢は 34.1 ± 10.0 歳であつた。年代別の割合は20歳代が43.4%と最も多かつた（表1）。性別は男性が5.9%、女性が90.9%、不明が3.2%であつた。看護師と

表1 年代別割合

年代	割合 (%)
20代	43.4
30代	23.9
40代	22.1
50代	8.8
60代以上	0.8
不明	1.0

n=624

しての臨床経験の平均年数は、11.3±9.7年であった。病棟における役割は、師長・副師長・主任など管理的地位にある者は10.7%で、病棟スタッフが88.0%、不明が1.3%であった。

2. 外国人看護師と働いた経験・外国人の患者を看護した経験

外国人看護師と働いた経験があるか、については「はい」は全体の8.7%、「いいえ」は91.2%、「不明」は0.2%であり、殆どの看護師は、外国人看護師と働いた経験がなかった。外国人の患者を看護したことがあるか、について「はい」は全体の83.3%、「いいえ」は14.3%、「不明」は2.4%であり、多くの看護師が外国人の患者と接した経験があった。

3. EPAの認知度

外国人看護師への関心の度合いを知るために、EPAの認知度について調べた。EPAを知っているか、について「はい」は全体の40.5%であり、そのうちここ1年以内に知ったのは、13.4%であった。EPAを何で知ったか、については「テレビのニュース」が全体の68.0%で最も多く、次が「新聞」の6.7%であった。EPAによる外国人看護師が日本の国家試験に初めて合格してから7年経過しているが、約6割の看護職がEPAについて知らなかった。これは、三重県におけるEPAによる外国人看護師の受け入れ人数が、1年に数名程度であり、受け入れを行っていない病院が殆どであることから、病院に海外の人材を受け入れることへの考えが浸透していないからであると考えられる。外国人看護師の受け入れを行っている病院における調査では、外国人看護師は「性格が明るい」「敬老精神がある」「接遇態度が良い」「辛抱強く業務にあたる」など⁷⁾、良い評価が報告されている。日本人の臨床看護師に、もっと外国人看護師の就労実態についての情報を伝え、理解を促進することが必要である。

4. 外国人看護師とのコミュニケーションについて

外国人看護師と日常生活の会話を行う事についてどう思うか、については「かなりうまくいくと思う」と「大体うまくいくと思う」を合わせて全体の約20.4%しかおらず、「少し心配である」が約49.0%と最も多かった(表2)。また、外国人看護師と専門的な会

話を行う事についても、「少し心配である」が最も多く、同様の傾向であった(表3)。自由記述では、「意志が明確に伝わるかどうか心配」「ニュアンスが伝わるのか心配」などがあった。1999年からベトナム人の外国人看護師7名を受け入れている病院でも、病院職員に質問紙調査を行った結果、コミュニケーションに関して「言葉のニュアンスでスムーズに気持ちが伝わらなかつたりすることがある」「言葉を濁さないことで表現がストレート」「何となく、は通じない」などの問題を挙げており⁴⁾、コミュニケーションを円滑にするための対策を十分に講じる必要がある。

5. 外国人看護師の業務内容について

外国人看護師が急性期の病棟で働くことについてどう思うか、については「少し心配である」と「かなり心配である」を合わせて全体の74.1%であるのに比べ、慢性期の病棟では、それらは全体の57.7%であった(表4, 5)。急性期の病棟で業務を行うことについての自由記述では、「急変時にすぐ対応できるのか心配」「口頭指示が飛び交うこともある場で対応できるのか」などスピードが要求される対応に不安があるという意見が多く、忙しい病棟では、外国人看護師のコミュニケーションや、緊急時の判断能力について、より不安を感じていると考えられる。しかし、「慢性期

表2 外国人看護師と日常会話することについて

回答	割合 (%)
かなりうまくいくと思う	0.2
大体うまくいくと思う	20.4
少し心配である	49.0
かなり心配である	17.0
わからない	12.7
不明	0.8

n=624

表3 外国人看護師と専門的な会話をする事について

年代	割合 (%)
かなりうまくいくと思う	0.3
大体うまくいくと思う	17.5
少し心配である	47.9
かなり心配である	21.5
わからない	12.0
不明	0.8

n=624

からゆっくりやれば良いのではないか」「じっくりやれば対応できそう」など、外国人看護師を受け入れる際の方策に結びつくような意見もあった。

外国人看護師が「日常生活援助を行うこと」、「与薬を行うこと」、「保健指導を行うこと」、「医師の診療の補助をおこなうこと」、については全ての項目で「少し心配」が全体の41.3%から48.9%の幅で最も多かった(図1-4)。自由記述では「入浴などの習慣が違うのに対応できるのか」「患者への説明が十分に伝わるのか」「ジェネリック(医薬品)など沢山出てきているので日本語(の薬の名前を憶えること)が大変ではないか」「患者や家族も含めて指導できるのか」「Dr.(医師)との相性がある、うまくコミュニケーションがとれるのか」などの不安を示す意見があったが、「基本的な看護技術は同じはずなのでできると思う」「手技を修得すればできると思う」「医師が努力すれば伝わる」という前向きな意見もあった。ただし、外国人看護師が行う保健指導については、「かなりうまくいくと思う」「大体うまくいくと思う」は他の項目に比べて全体の18.1%と最も低く、自由記述には前向きな意見もなかったことより、言葉を用いて看護を行う際の困難さを予測していることが考えられた。外国人看護師が看護業務を行うことについては「わからない」も全体の10.3%から13.8%あったが、それらの質問項目についての関心を聞いたところ

表4 外国人看護師が急性期の病棟で働くことについて

回答	割合 (%)
かなりうまくいくと思う	0.0
大体うまくいくと思う	12.0
少し心配である	40.9
かなり心配である	33.2
わからない	13.3
不明	0.6

n=624

表5 外国人看護師が慢性期の病棟で働くことについて

回答	割合 (%)
かなりうまくいくと思う	1.0
大体うまくいくと思う	26.4
少し心配である	44.6
かなり心配である	13.1
わからない	14.1
不明	0.8

n=624

「関心がある」は、全ての項目それぞれにおいて全体の約42%以上あった。これは、外国人看護師の実態がわからないために回答しなかったが、関心を持っている人が相当数いることを示していると考えられる。

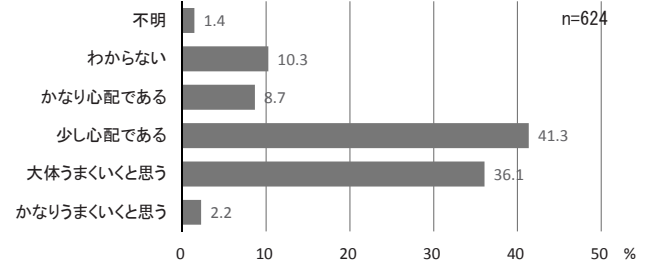


図1 外国人看護師が日常生活援助を行うことについて

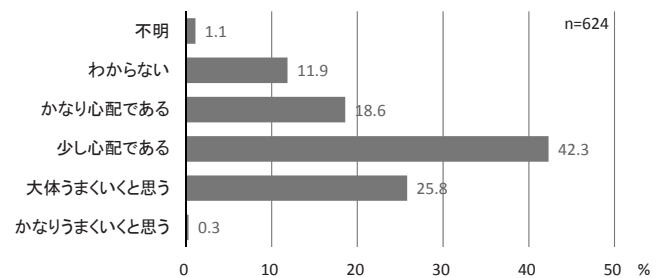


図2 外国人看護師が与薬を行うことについて

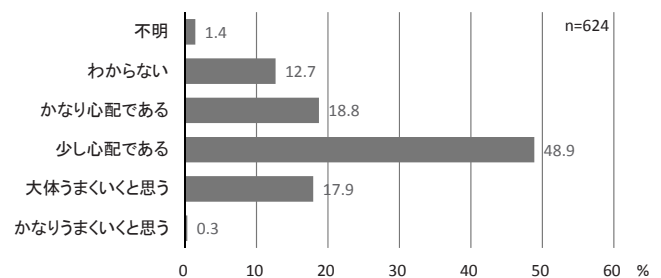


図3 外国人看護師が保健指導を行うことについて

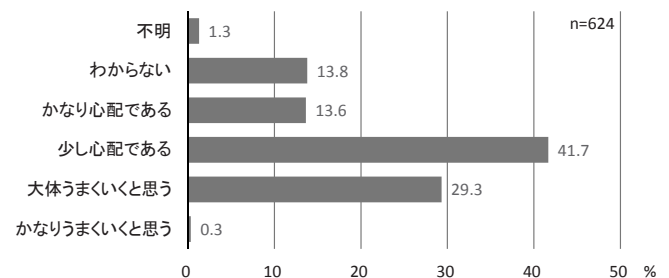


図4 外国人看護師が医師の補助を行うことについて

6. 協働への気持ち

外国人看護師と同じ病棟で働きたいかについては、1(思わない)から5(思う)の5段階のスケールのうち、中間の3が約50%で最も多かった。自由記述では、「(外国人看護との調整で)これ以上忙しくなりたくない」「コミュニケーションが心配」などの不安を示す意見があった一方、「新たな価値観に触れるこ

とができる」「不安もあるが違った面からの学びになりそう」などの前向きな意見もあった。また、外国人看護師が今後必要だと思うか、についても外国人看護師と同じ病棟で働きたいか、と同じように全体の約50%が3を選択していた。自由記述には、「わざわざ外国人でなくても良い」「日本人が働けるようにするのが先」「看護師不足なので来てほしい」「日本の看護を自国に持ち帰って欲しい」などの意見があった。全体として、外国人看護師の実態がわからないために、中間の数字を選ぶ人が多かったことが考えられるが、それぞれの設問において、4から5(思う)の前向きな気持ちを選んだ人も全体の約17%から19%いることから、外国人看護師を受け入れる事について臨床看護師は否定的のみに感じているわけではないことが示されていた。

IV. まとめ

EPAによる、外国人看護師候補者に行った調査によると、日本に来た1番の動機は、「自分のキャリアをのばしたいから」であり⁸⁾、賃金の高さではなかった。その他の動機では、「自分たちのケアの天性を日本人に見せたいから」「日本の高度先端技術を勉強したいから」も上位にあり⁸⁾、外国人看護師は日本で働くことについて、誇りを感じキャリアアップの目的があることがうかがえる。

外国人看護師に日本の病院で、できるだけストレスがなく、能力を発揮してもらうためには、日本側からの多くの支援が必要であるが、本調査の結果からは、三重県の病院で働く看護師は、外国人看護師について、受け入れ難く思っているわけではなく、実態を良く知らないために不安な気持ちがあることが推測された。外国人看護師を受け入れた施設では、「日本人スタッフが異なる文化を理解するきっかけとなった」「職場が活性化した」「日本人スタッフが看護とは何かを改めて考えるきっかけとなった」「日本人スタッフの日本語の言葉遣いが丁寧になった」「患者が生き生きした」などの変化が報告されており⁹⁾、外国人看護師を受け入れることは、日本人看護師にとって困難もあるが、得るものも大きいことが示されている。

今後、日本人の臨床看護師に、外国人看護師の受け入れに対して協力を得やすくするためには、まず外国人看護師のコミュニケーションや看護師としての能力

を示す情報を具体的に伝え、外国人看護師自身や必要な支援について理解してもらうことが重要である。

V. 本調査の課題

外国人看護師の受け入れを促進するためには、日本全体の規模で対策を講じていく必要がある。しかし、本調査は、三重県の施設のみを対象としていることから、対象者の回答は、地域特性や保健・医療の状態による影響を受けている可能性があり、全国への一般化は難しい。今後、他県においても同様の調査を行っていく必要がある。

また、本調査における質問紙の中で対象者には「日本語N2レベルの状態」を文面で定義して示したが、N2レベルの状態を具体的にイメージしにくかった可能性があることから、今後は外国人看護師が受け入れられた施設において実際に就労している状態を画像で示す等などして理解を求めた上で、調査を行う必要がある。

本研究は平成27年度三重県立看護大学理事長特別調査経費の助成を受けて行った。

【文献】

- 1) 内閣府：労働力人口と今後の経済成長について、2014. http://www5.cao.go.jp/keizai-shimon/kaigi/special/future/0312/shiryuu_02.pdf
- 2) 川口貞親, 平野裕子, 大野俊：日本の全国病院における外国人看護師受け入れに関する調査(第3報)-地域別差異の検討-, 九州大学アジア総合政策センター紀要, (5), 147-152, 2010.
- 3) 厚生労働省：経済連携協定(EPA)に基づく外国人看護師・介護福祉士候補者の受入れ概要, 2016. http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11650000-Shokugyouanteikyokuhakenyukiroudoutaisakubu/epa_base_28.pdf
- 4) 竹内美佐子：外国人看護師との協働上の課題と協調のプロセス, Nursing Business, 82-89, 2009.
- 5) 川口貞親, 平野裕子, 大野俊：日本全国の病院における外国人看護師受け入れに関する調査(第1報)-結果の概要-, 九州大学アジア総合政策センター紀要, (3), 53-58, 2010.

- 6) 堀田かおり, 丹野かほる: 外国人看護師受入れに関する研究 看護職者の外国人看護師との協働に対する意識調査, 日本看護学会論文集: 看護総合, (39), 107-109, 2008.
- 7) 平野裕子, 小川玲子, 川口貞親, ほか: 来日第1陣のインドネシア人看護師・介護福祉士候補者を受け入れた全国の病院・介護施設に対する追跡調査(第3報)-受け入れの実態に関する病院・介護施設間の比較を中心に-, 九州大学アジア総合政策センター紀要, (5), 113-125, 2010.
- 8) 平野裕子, 小川玲子, 大野俊: 2国間経済連携協定に基づいて来日するインドネシア人およびフィリピン人看護師候補者に対する比較調査-社会経済的屬性と来日動機に関する配布調査結果を中心に-, 九州大学アジア総合政策センター紀要, (5), 153-162, 2010.
- 9) 小川玲子, 平野裕子, 川口貞親, ほか: 来日第1陣のインドネシア人看護師・介護福祉士候補者を受け入れた全国の病院・介護施設に対する追跡調査(第1報)-受け入れの現状と課題を中心に-, 九州大学アジア総合政策センター紀要, (5), 85-98, 2010.